時の流れのなかで
福生 あゆみ・回顧録

旧福生村、熊川村が合併して福生町が誕生したのが昭和15年11月。その当時、7921人だった人口は、戦後の急激な都市化に伴い、昭和43年には3万人を突破し、45年7月に市制施行。58年9月には5万人を突破しました。

5人に1人が戦後に引越してきた福生新市民とはいえ、ここを「ふるさと」として愛する気持は皆共通のもの。

遠い遠い歴史のドラマに思いをはせると共に、戦前、戦後、現在に至る超スピーディな経済成長時代と私たちの暮しの変貌を、改めてふりかえってみることも必要なのではないでしょうか。

戦前、戦後の激しい移り変りの中で育ってきた人たちも、いまやっと落ち着いて自分の昭和史を語り合ってみたいとき。その子供たちが社会の第一線で活躍するとき、時代は21世紀を迎えます。「私の育った福生は……」と自慢しながら、そのまた子らにふるさとを語りついでいきたいものです。

●プロローグ

ふっさ歴史物語

●多摩川のほとり、武蔵野台地の夜明け

福生市は多摩川によって形成された武蔵野台地の段丘上に位置しており、段丘はいまから2万年前の富士山の火山灰を主体にした立川ローム層が覆っています。

この地に人間が初めて生活を営むようになったのは約1万年前と推定されます。市内の福生不動尊遺跡から縄文時代早期の土器が出土しており、中期になると拝島段丘に人々の暮しが大規模に営まれていたようで、特に長沢遺跡には集落跡も発見されています。

弥生時代・古墳時代になると人々は福生を離れて生活に適した土地へと移りはじめたものと思われ、この時代の遺跡や遺物はほとんど発見されていません。

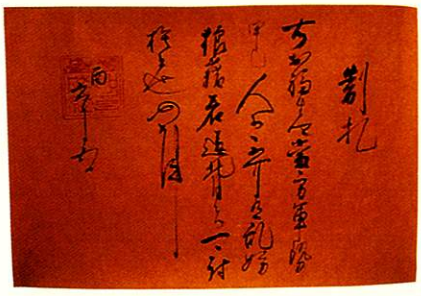
●「福生郷」の生いたち

福生が歴史に初めてその名を見せたのはずっと後になり11世紀に入ってからです。武蔵七党・西党の小川氏系図の中に、宗末という武士が福生村を賜ったことが記されています。

中世の歴史を物語る文化財には板碑（供養塔）があります。永昌院に嘉元2年（1304）と記された板碑が残っており、市内に現存する石の文化財では最古のものです。

室町時代になると、八王子城主北条氏照が支配するところとなります。永禄4年（1561）には〝福生郷〟内での乱暴を禁止する制札が発行されています。

しかし、5代にわたって関東に威をふるっていた北条氏もやがて豊臣秀吉に滅ぼされ、やがて徳川家康が入ってきます。



北条氏照の制札

板碑 嘉元2年（1304）市内最古の石の文化財

棟札　正長2年（1429）

長沢遺跡から発掘された縄文時代中期の針形土器

●雑穀栽培、養蚕を中心とした畑作地帯に

江戸時代に入ると、福生村は天領に、熊川村は天領、旗本領に分かれて統治されるようになり、幕末まで続きます。

『新編武蔵風土記稿』によると、江戸時代の福生村は、東は、中里新田および殿ヶ谷戸村、南は熊川村、西は多摩川をへだてて下草花村、北は川崎、石畑に接する村で東西約30町、南北22町ほどありました。正保の頃までは畑地が中心でしたが、その後、水田も新たに開発されるようになりました。農家では野良仕事の合い間に、男は多摩川の筏流しや漁業などを営み、女は機織りをしていたといいます。

一方、熊川村は段丘上に発達したため耕地の殆どが畑でした。そのため多摩川対岸にも水田を開くなど新田開発にも力を入れましたが多摩川の氾濫にはたびたび苦しめられ、本格的な水田開発事業が着手されたのは明治以降のことでした。

また福生、熊川一帯は尾張公のお鷹場であったため、鳥や獣の捕獲が禁止され、そのために農作物への被害も多く、代官所から鉄砲を借り受けたり案山子を立てることを願う文書などが残っています。

藤雲嶺画「牛浜出水の図」（安政年間）

熊川学舎のあった熊川神社

福生学舎のあった長徳寺

熊川学舎の仮校舎だった福生院

開通した頃の青梅鉄道

●明治になって組合役場ができて

明治に入ると廃藩置県により新たに韮山県、品川県などに属し、明治5年には神奈川県となりさらに11年には神奈川県多摩郡となります。そして17年に福生、熊川、川崎、五の神、羽村による五ヵ村連合戸長役場が置かれるようになりましたが、その後これは分裂し、明治22年の町村制の施行により、福生、熊川両村による組合役場が設立されました。

以来50年間両村の共同による村づくりが行なわれます。そして同26年には神奈川県から東京府の所轄に変わり、やっと現在の形態として落ち着いてくるのです。

また、教育面では福生第一小学校の前身、福生学舎が明治6年長徳寺本堂を借りてスタートし、翌7年には熊川学舎が、福生院本堂を仮校舎にして授業をはじめ、(のちに熊川神社に移転)大正の頃まで続きました。

明治から大正、昭和へと至る福生は、養蚕を中心とした静かな農村時代が続きます。福生の地場産業としては酒造のほかに、片倉製糸をはじめとするいくつかの製糸工場があり、明治20年代から昭和初期にかけて最盛期を迎えました。

●鉄道が走り、電灯がつき……

青梅鉄道が開通し福生駅が開設されたのは明治27年のこと。

大正4年になると、村にも電灯がともるようになり、それから6年のちには電話もひかれました。大正14年には福生～五日市間にバスが運行、また同年には五日市鉄道が開通されるようになり、福生は西多摩地区の玄関口として活気を呈してきます。

指出し明細帳

●福生・昭和史

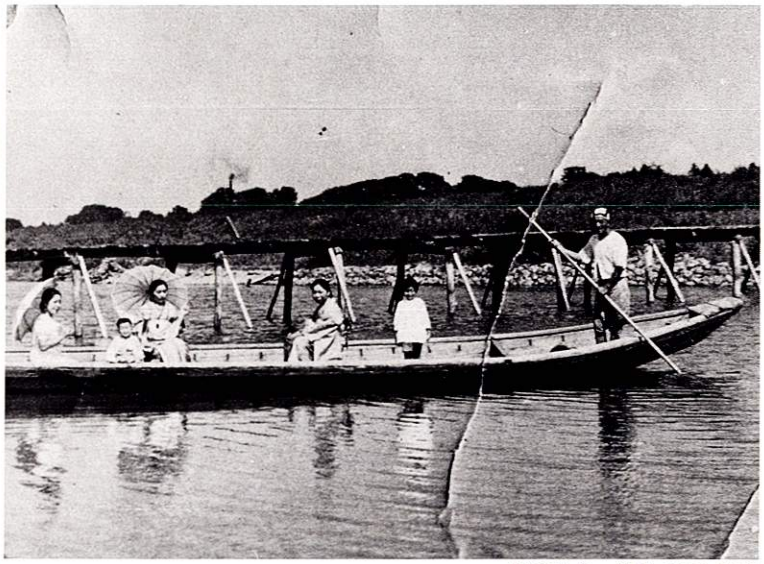
福生町の誕生と戦前戦後

昭和に入ると鉄道の開通で、多摩の名物いかだ流しも姿を消すようになり、青梅鉄道は御岳まで延びました。昭和5年の国勢調査によると人口6005人、1024戸になっています。以来、人口は徐々に増えつづけ、昭和15年11月10日、歴史を共にしてきた福生村と熊川村が合併して「福生町」が誕生しました。人口7921人、養蚕の盛んな純農村でした。

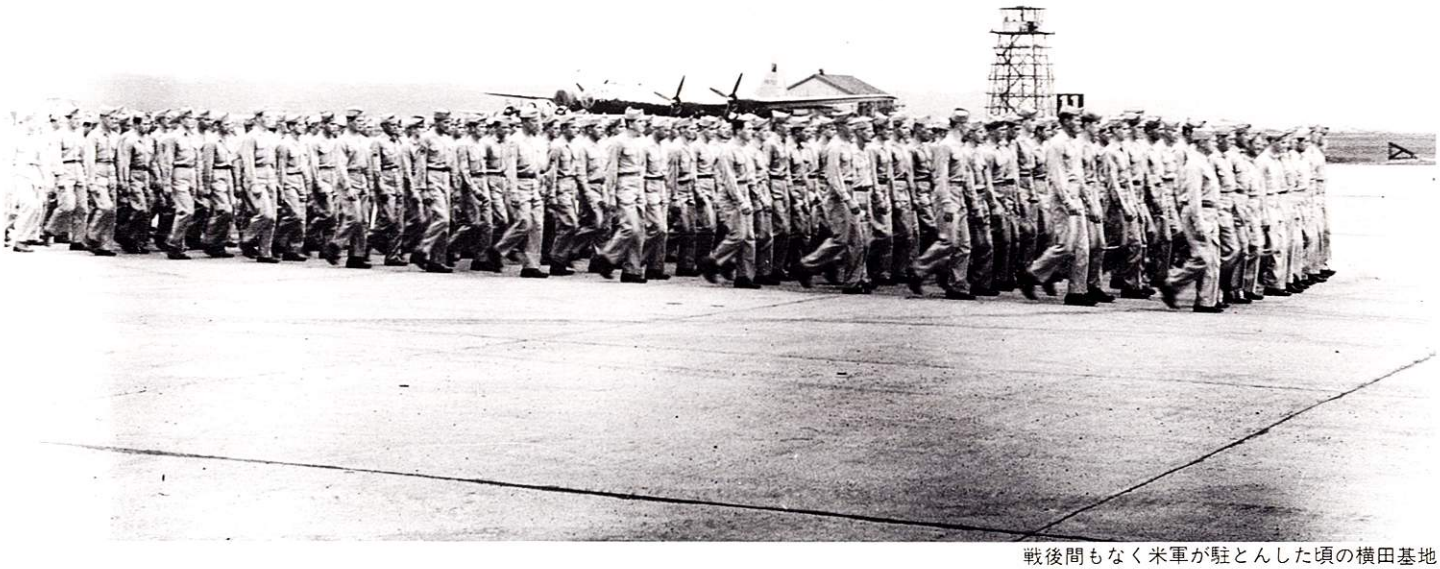
町が誕生する前年の昭和14年、政府により町の北部一帯約200haが接収され、多摩飛行場ができました。15年には東京陸軍航空学校（のちに少年飛行兵学校）が、16年には陸軍航空整備学校が開設され、そのため人口も急増していきます。そしてその年12月8日、日本は対米英に宣戦布告し、太平洋戦争へと突入していくのです。

物資が配給制になり、ガソリンに代って木炭バスが走り、若い女性(14歳以上)も勤労動員されるなど戦時下の影響は福生町民にも大きかったものの、農家が多かったため、食糧などには比較的恵まれていたようです。19年頃からは都心から次々と学童が疎開してくるなど、町は戦時下のなかであわただしい不安な日夜に明け暮れたのです。

昭和初期の農業風景



昭和元年、熊川の渡し風景



戦後間もなく米軍が駐とんした頃の横田基地

戦後は、新しいアメリカ文化もいち早くとり入れながら――

昭和20年３月10日東京大空襲。４月には熊川地区にも爆撃があり町民２名が死亡しています。その年の８月、日本はポツダム宣言を受諾して降伏しました。

敗戦を機に、軍の施設はすべて米軍に接収され、飛行場は横田基地として米軍の管理に移されました。男女同権、労働者の団結、教育の自由等の新しい時代の幕開けの中で福生・熊川青年団が発足し、地域の復興へ向けて活動し、その活動ぶりがＮＨＫラジオで放送されたこともありました。

昭和22年には六・三制の実施で福生中学校が開校、小学校には「母の会」もでき、早くも学校給食がはじまります。その年の人口は１万4066人（男8037、女6029人）、2300戸でした。

戦後の福生町は基地を中心に、基地労務者、サービス業等が激増し、さらに米軍ハウスが約2000戸建てられ、商店街は急速に整備されていきますが、一方で農業は年々縮小されていきました。

まちづくりはいち早くすすみ、学校校舎の新築、福生病院の開設、婦人会の発足、鉄道やバスの増設整備、道路の整備、全戸上水道の設置など、町は新しい都市へ向けて近代的な環境づくりが急ピッチで進んでいきました。

昭和30年10月の国勢調査による町の人口は１万9096人、4137世帯。町民運動会、福生七夕まつりをはじめとする文化、スポーツ活動も年々高まり、そのための文化施設も次々と誕生していきます。32年９月には「福生町広報」も創刊され、広報には、新しいまちづくりの施策がぎっしり報告されるようになりました。

昭和32年には福生、羽村、瑞穂による福生都市計画区域ができましたが、本格的な都市整備は昭和37年から。基地のまちからの脱皮が真剣に考えられるようになり、首都圏整備法による市街地開発区域の指定をうけます。

また、地方から首都圏への人口流入の激化により、福生への転入者も多くなっていきます。昭和38年10月には熊川南地区に東京都住宅供給公社福生住宅ができ、15棟592戸が入居しました。

昭和20年代中頃の福生駅前

首都のベッドタウンへ将来へ向けて豊かなふるさと

●首都圏のベッドタウンとして、人口急増

町は24時間体制で生活環境づくり——

〝基地のまち・福生〟はやがて基地活動の縮小に伴い、本来の落ち着きをとりもどした〝住宅都市〟へと移行していきます。

町内には生活改善センター、電報電話局、都立工業高校などの新しい施設が毎年のようにオープンし、昭和39年1月には役場も新築されました。

小学校は防音校舎として改築がすすみ、39年10月からはゴミの収集処理もはじまります。

昭和40年10月の国勢調査によると、町の人口は3万575人と急激に増え、小中学校、幼稚園、保育園の新設などが町の重要課題にもなってきました。

かつての農村地帯の風景は年々姿を消していき、住民の暮しも第一次産業から第二次、第三次産業へと変っていきます。首都圏への通勤、通学者も年々多くなり、それを受けて駅前広場が整備され、41年12月からは福生発の東京直行電車も運行されるようになりました。人口の増加は、42年2月から入居を開始した東京都住宅供給公社加美平住宅の完成でさらに多くなり、1042世帯が新しい住民として加わりました。

完成した当時の都供給公社福生住宅(昭和38年)

落ち着いたたたずまいの住宅公団福生団地

づくりを

●福生市の誕生――健康で快適な文化都市へ向かって

昭和43年6月、人口3万人以上をかかえ、市との行政格差に悩む全国33の町が「新市制全国期成会」を結成、2年間にわたって地方自治法の一部改正（市制施行の人口要件を3万人以上に改める）する運動を続けました。その改正法が45年3月に国会で可決されたため、同年7月1日をもって福生町は「福生市」として市制施行しました。

そのときの人口は3万8749人、世帯数は1万1631戸で、町制施行した頃の約4倍へと大きく進展しています。

市制施行と併せてオープンした福祉会館では記念式典も一段と華やかに行なわれ、その年の秋から市民総合体育祭もスタートしました。

翌46年には第6番目の小学校をはじめ、消防署、都立福生高校、保育園などもでき、福祉会館へ行くお年寄りには送迎バスも運行されるようになりました。

そんな中で新旧住民の交流をはかろうという動きも高く、"ひと声運動"や福生市の新しい民謡「福生よいとこ」や「ほたる小唄」などもでき、夏祭りは全市民をあげての交流の場になりました。

同時に、都市計画法による計画的なまちづくりが行なわれるようになり、乱開発による人口増加を防ぐための厳しい規制、自然環境の保護育成、さらに住民の健康づくりや福祉施策の強化、教育・文化活動を通じて地域コミュニティづくりを深めるなどのソフト面での施策に力を入れるようになりました。

昭和30年代中頃の道路整備風景

昭和48年のオイルショックを機に高度成長の一途を続けた日本経済は低成長期へ向かい、そのことが資源の見直し、ものの価値の再検討等を考えるいい機会となりました。同時に、物質文明に欠けやすい精神的な豊かさや忙しい都市生活の中で忘れられてきた地域コミュニティ、自然とのふれあいなどが新たなテーマとして求められています。とくに今後は高齢化社会へ向かって、真に住民のすべてが、豊かに安心して住める都市をつくるため、みんながアイデアを出し合い、参加し合っていくべき時代になってきています。

活気あふれる福生駅西口前（現在）